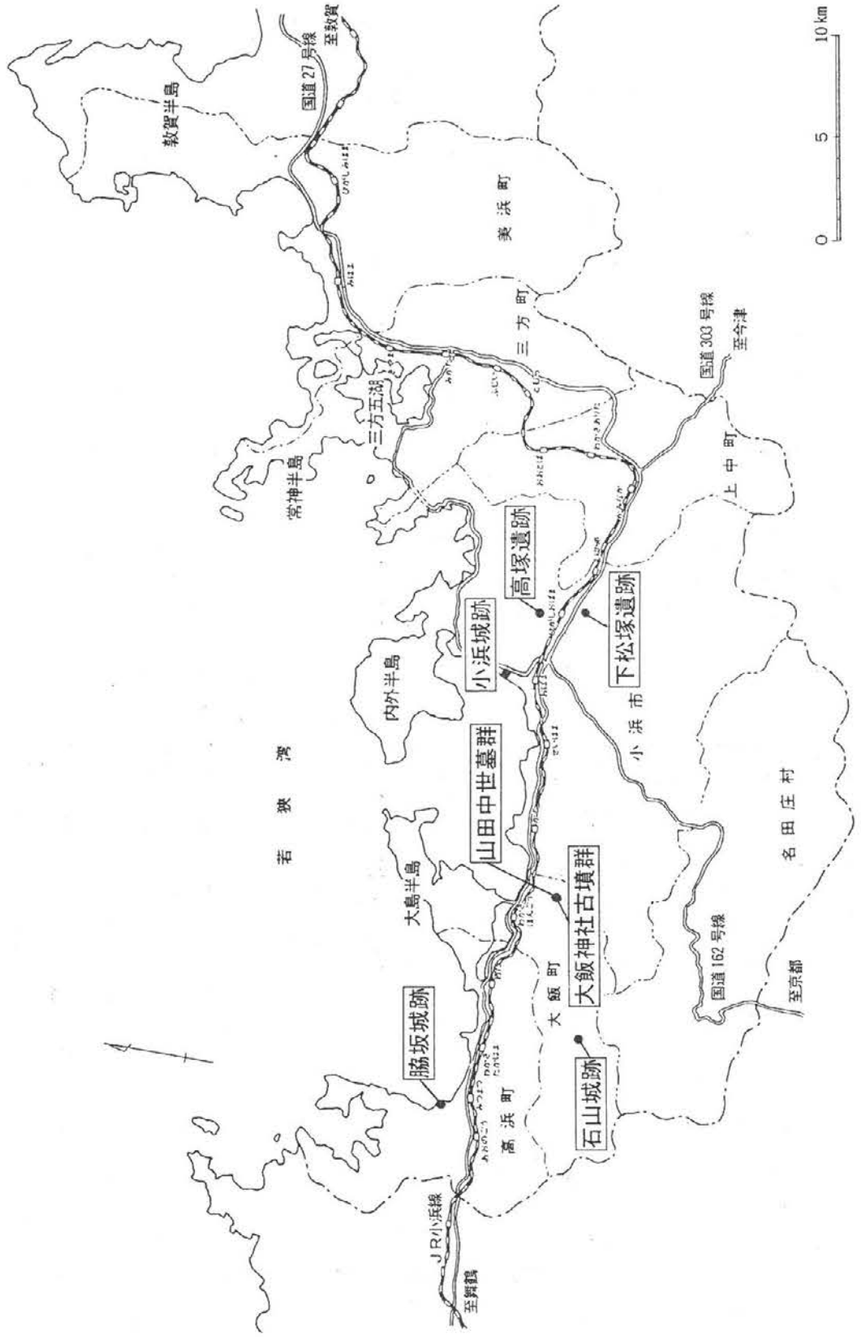
平成11年度

若狭地方における発掘調査の成果

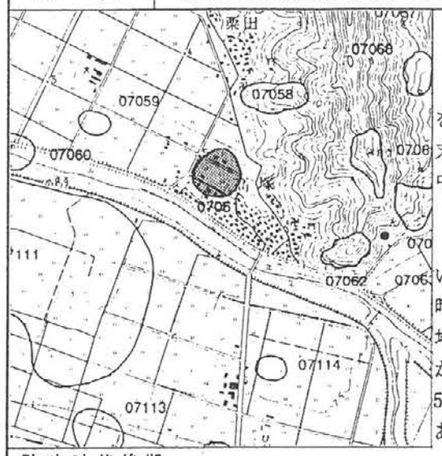
平成12年３月12日（日）

福井県立若狭歴史民俗資料館



遺跡位置図

遺　跡　名	高塚遺跡
所　在　地	小浜市高塚9号1、2、3番地
調査原因	宅地造成事業
調査期間	平成11年3月23～9月24日
調査主体	小浜市教育委員会
調査担当者	下仲隆浩、西島伸彦、松川雅弘
調査面積	約970㎡
時　代	弥生時代後期、奈良時代



調査の概要

〈遺跡の環境〉

高塚遺跡（07062 福井県遺跡地図）は小浜平野を西流する北川の右岸に位置している。周辺には丸山河床遺跡(07059)、府中折手遺跡(07110)、府中石田遺跡(07111)などがある。

〈調査内容〉

今回の調査では、道路により壊される部分についてトレンチをＬ字形に設定した。遺構面は奈良時代と弥生時代後期の2面が確認されている。平均的な遺構深度は前者が現地表から約-0.9m、後者が約-1.2mである。層序は7層検出されている。第5層が奈良時代、第6層が弥生時代後期の包含層である。内容は下記の通りである。

弥生時代後期

遺構面は第7層上面に存在し、建物跡2棟、土坑1基、小穴数十基を検出した。建物跡のうち建物-02は主となる柱の周囲に楕円状に小穴が検出されたことから、建物形態は壁立式の平地式住居と思われる。規模は短径約4.9mである。注目すべき遺物として建物-02の北東約3.6mのところで、フイゴの送風管と思われる鋳造関連の土製品を検出した。その他の遺物は下記の通りである。

弥生土器(壺、甕、高杯、蓋、器台など)

奈良時代

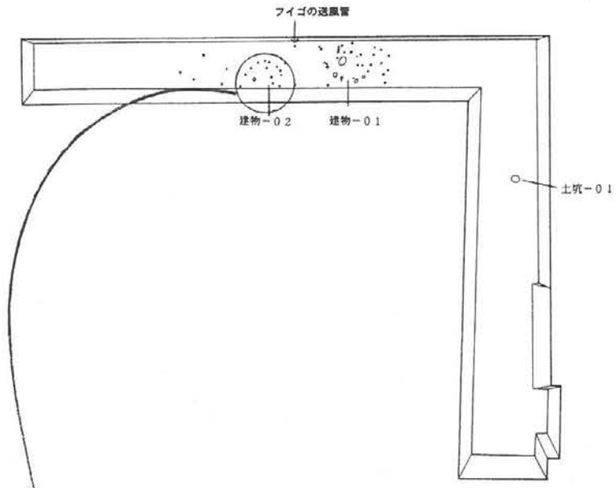
遺構面は第6層上面に存在し、建物跡2棟、溝7条、土坑5基、小穴数十基を検出した。建物跡は2棟とも掘立柱建物で、建物-04は庇を含めた梁間3間、桁行4間以上の長軸を南北に向けた建物と考えられる。注目すべき遺物として溝-02から人形木製品、湿地から木簡、溝-07から建物の梯子を検出した。その他の遺物は下記の通りである。

須恵器(杯A、杯B、壺、平瓶など)　土師器(杯A、椀、甕)　製塩土器(若狭地方の製塩土器編年で船岡式と呼ばれているバケツ状の土器)　木質遺物(建築部材など)

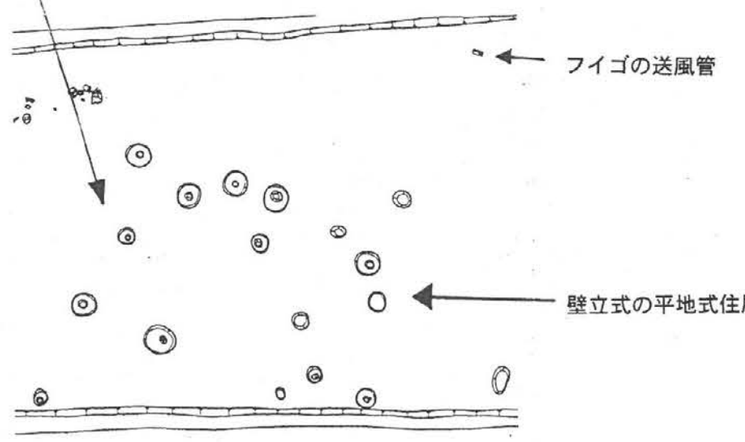
〈調査のまとめ〉

弥生時代後期の遺構面では、福井県で初めて壁立式の平地式住居を検出した。当時の一般的な住居形態の竪穴式住居を採用せず壁立式の平地式住居にしたのは、当遺跡が湧水地近くであることから、地面を掘りくぼめるという竪穴式住居の構造が適さなかったためと思われる。遺物、特に土器類は、丹後地方や近江地方の影響を受けた壺や甕など日常生活に用いられたものが主体である。奈良時代の遺構面では、この遺跡を特徴付けるものとして、製塩土器・人形・木簡などが検出されている。製塩土器は輸送用のものと考えられ、木簡はそれに附されたものと考えられる。また、人形の存在は公的な祓いの儀式が推定できる。これらのことから、掘立柱建物を含むこの遺跡上面の性格は「調塩」の集散機能を持った公的な施設であると考えられる。

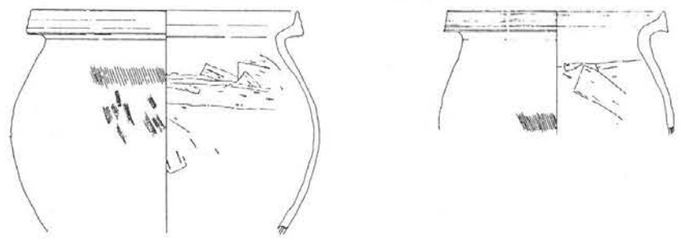
西島伸彦



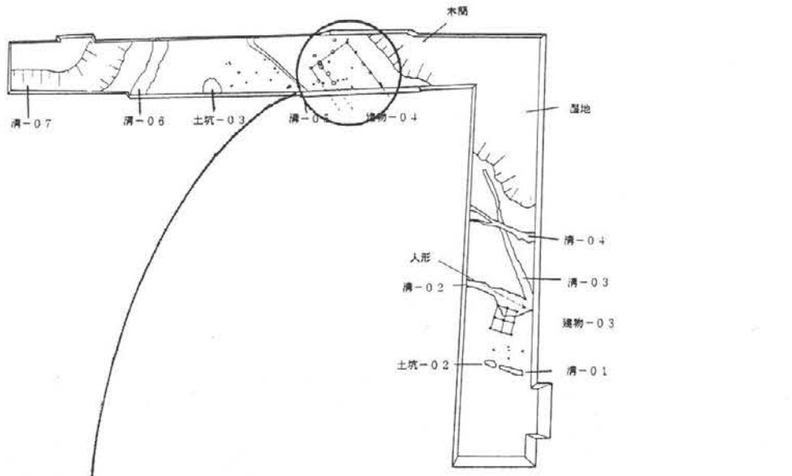
高塚遺跡　弥生時代後期遺構概略図(Ｓ＝1／800)



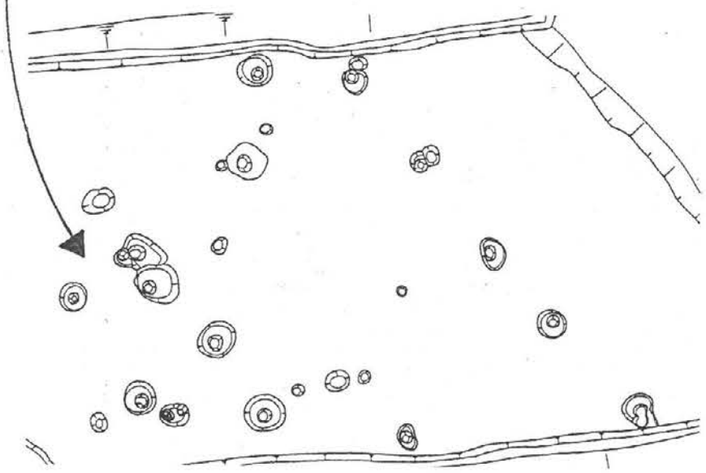
主要遺構平面図（Ｓ＝1／100)



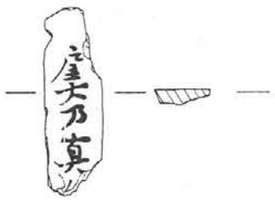
遺物実測図(Ｓ＝1／4)



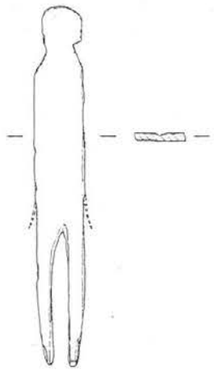
高塚遺跡　奈良時代遺構概略図(S＝1／800)



主要遺構平面図（S＝1／100)

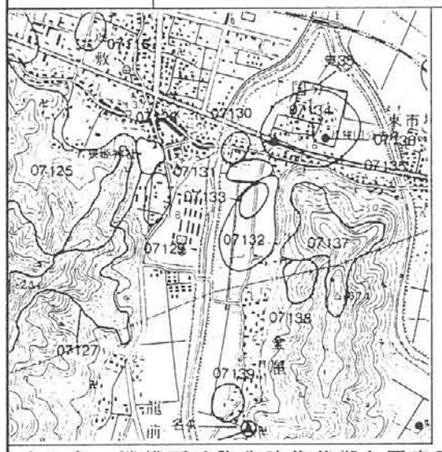


遺物実測図(S＝1／2)



遺物実測図(S＝1／4)

遺　跡　名	下松塚遺跡
所　在　地	小浜市遠敷118号下松塚
調査原因	遺跡確認調査
調査期間	平成11年10月4日～12月10日
調査主体	小浜市教育委員会
調査担当者	下仲隆浩、西島伸彦、松川雅弘
調査面積	480㎡
時　代	弥生時代後期、平安時代



〈遺跡の環境〉

下松塚遺跡(07131 福井県遺跡地図)は遠敷谷開口部の東側に位置している。周辺には国分遺跡(07134)・国分古墳(07136)・国分古墳(07135)・若狭国分寺跡(史35)が近接する。

国分地区はその名のとおり国分寺が存在し、律令時代においては政事と宗教の重要な場所であった。さらに小浜市内で屈指の規模を持つ円墳と、市内で唯一鏡を持っていた前方後円墳が存在することから、この地区は古代において非常に重要な地区であったことが推察される。

〈調査内容〉

道路敷によって破壊される部分についてトレンチ調査を実施した。規模は幅8m×延長60mとした。遺構面は弥生時代後期と平安時代の2面を確認している。平均的な遺構深度は前者が現地表から約－2.5m、後者が約－1.5mである。層序は8層検出している。第7層が弥生時代後期・第3層が平安時代の遺物包含層である。内容は下記のとおりである。

下面調査

遺構面は第8層上面に存在し、調査区の東端から約2mの地点で大きく傾斜を始め、約10mの地点で安定し西へ延びる。遺構は溝を1条とピットを23箇所、そして土坑を4箇所確認している。遺物はその斜面にへばり付くように堆積しているのを確認している。また、この斜面の裾に当たる位置に後世の川の痕跡があり、それが下面遺構に伴う遺物包含層を分断している。遺物は下記のとおりである。

土　器

弥生式土器(弥生時代後期、甕・鉢、丹後・近江地方の影響を受けたもの)

上面調査

遺構面は第4層上面に存在し、溝を2条とピットを13箇所確認している。この遺構面は、検出した面の西半分が撹乱によって破壊されている。さらに調査区中央部を東から西へ、後世の暗渠排水によって破壊されている。このように上面遺構は破壊が著しく、十分な資料が得られていない。遺物は下記のとおりである。

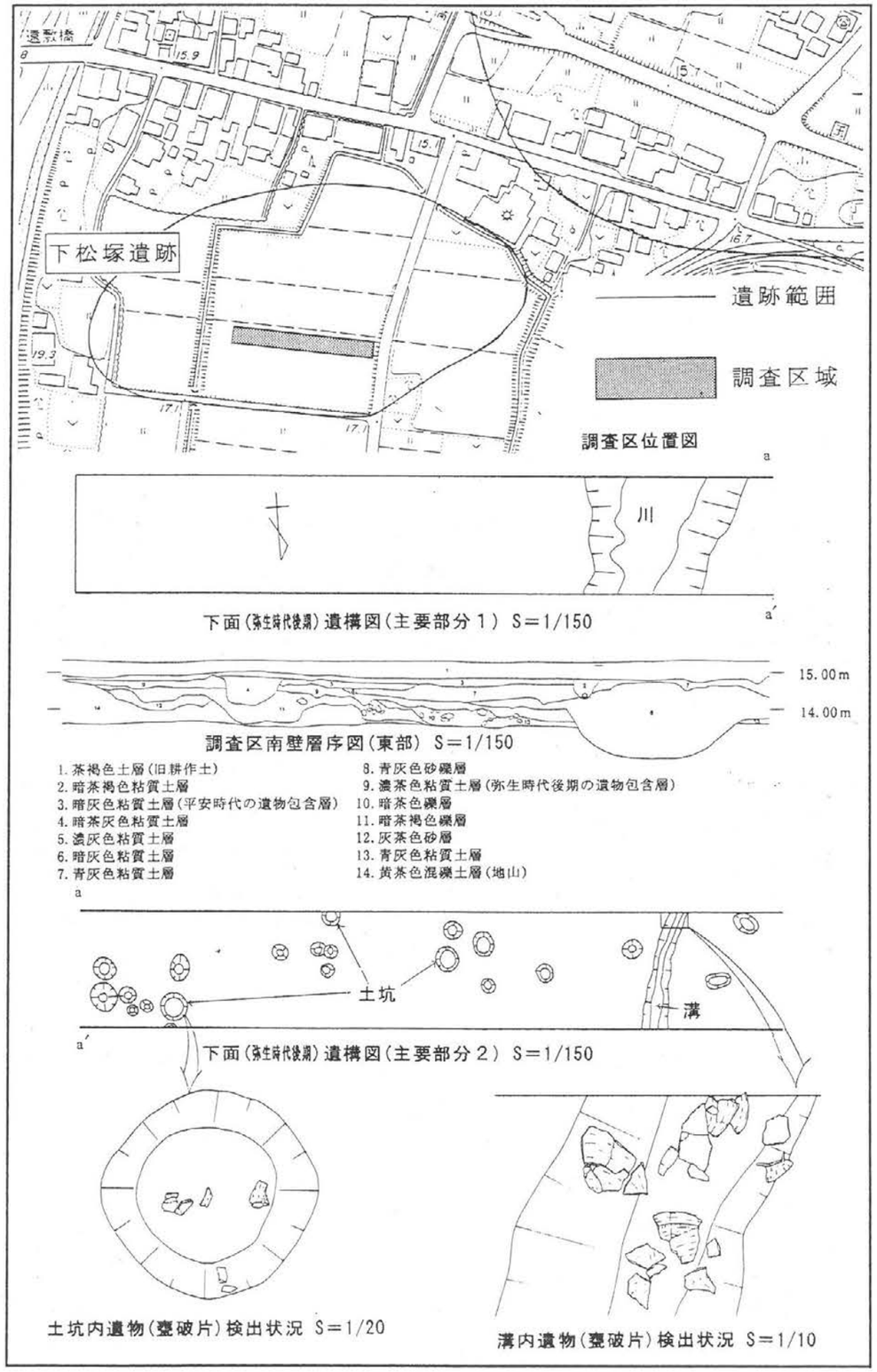
土　器　　木質遺物

須恵器(杯A、杯B、杯蓋)　黒色土器(椀)　井戸部材(枠・柱根)

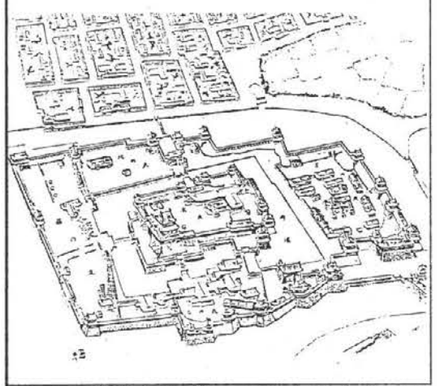
土師器(甕、椀底部・糸切り底)　緑釉陶器(椀・山城産)

〈調査結果〉

上記のことから、下松塚遺跡は弥生時代後期と平安時代の遺構面・遺物を持つ、複合遺跡であることが確認された。小浜平野ではこのような複合遺跡の事例が複数確認されていることから、この地域における遺跡の代表的な垂直分布であるとも考えられる。さらに、下面で確認された旧地形や良好な遺物を近年の調査例と関連させると、小浜平野における弥生時代後期の文化・生活圏も復元できる可能性が出てきた。　松川 雅弘



遺　跡　名	小浜城跡
所　在　地	小浜市城内一丁目
調査原因	公共下水道管渠敷設工事
調査期間	平成11年6月21日～平成11年10月19日
調査主体	小浜市教育委員会
調査担当者	下仲隆浩
調査面積	約420㎡
時　代	江戸時代



〈遺跡の環境〉

小浜城は慶長6年(1601)京極高次により築城が開始され、酒井忠勝入部後の天守閣、各櫓等の普請で完成を見た近世平城です。総構規模は18,937坪(62,492㎡)で、南北両河川と小浜湾を巧みに利用した縄張りをもちます。

現在の小浜城跡は、天守台を含む本丸石垣の2／3を残すのみですが、地下には良好な遺構が残存することがこれまでの調査で明らかになっています。

〈調査の内容〉

今回は平成9･10年度と同様に、下水道管渠布設部分で幅1.5ｍのトレンチ調査を実施しました。また、城絵図などの歴史史料も積極的に活用して遺構の確認を行っています。その結果石垣としては二の丸橋に伴う二の丸側張出し石垣、西の丸内堀石垣、二の丸から西の丸にかけての南輪石垣、船見櫓石垣を検出しています。

二の丸橋の張出し石垣は上部が遺らず、わずかに裏込めなどの基礎と東西の根石が各１石ずつ残存するのみでした。しかし、この遺構により二の丸橋の取付け部分の上幅は約3.6ｍ(2間)となることが判明しました。

西の丸内堀石垣は、やや小型の自然石を乱雑に積んで構築しています。前年度までに検出されている内堀外周の石垣と同様の構築形態を示しています。

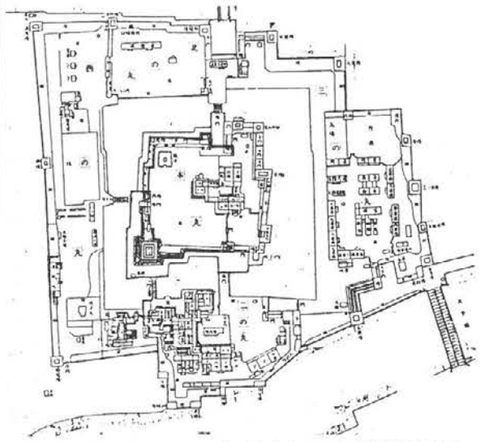
二の丸から西の丸にかけての外輪石垣は合計で約19ｍ検出されています。大型の花崗岩の割り石を用い、間詰石を多用しながら水平方向を意識して積み上げていく構築方法をとっています。

また、建物跡としては二の丸御殿の礎石と思われるものを二石検出していますが、調査区が狭いため建物規模などはわかっていません。一方、西の丸では弁財天宮に伴う柱穴列を検出しています。絵図との照合から神社外周に設けられた玉垣跡と考えられます。

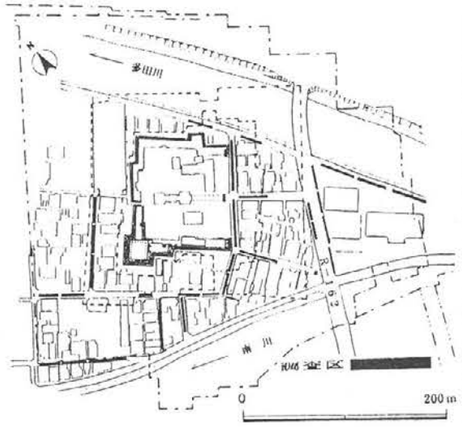
〈ま と め〉

これまでの調査により、石垣は場所により積み方、石材にかなりの差異があることが明確になりました。内堀の外周石垣や本丸搦手(西津方面)張出し石垣は、小型の自然石を乱雑に積む構築をしています。それに対して、上部に建物を伴う石垣や外堀(河川)に接する外郭石垣、土橋上積みに見られる景観を考慮した石垣は、花崗岩の割石を間詰石を多用しながら構築しています。三の丸建物跡で検出された石垣については建替えに伴う作事と考えられ、小型の花崗岩の切石を間詰石を用いずに隙間なく積んで構築しており、構築時期の年代差を示す資料といえます。これらのことから、同じ城でも石材、使用場所、構築年代、構築工人などの様々な要素によって石垣の差異が生じてきているといえます。今後は文献資料の検討を同時に行い、小浜城全体としての構造、および石垣構築の歴史を捉えていかなければいけません。

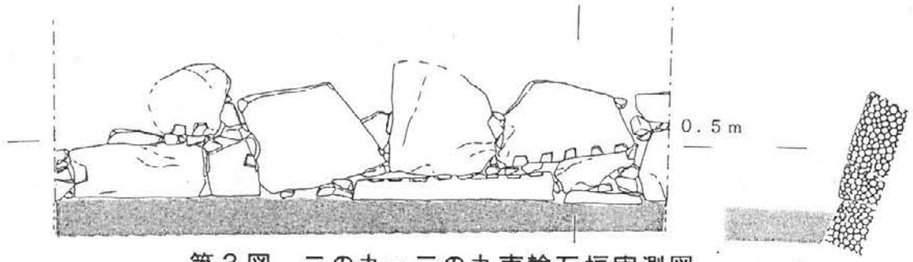
（下 仲）



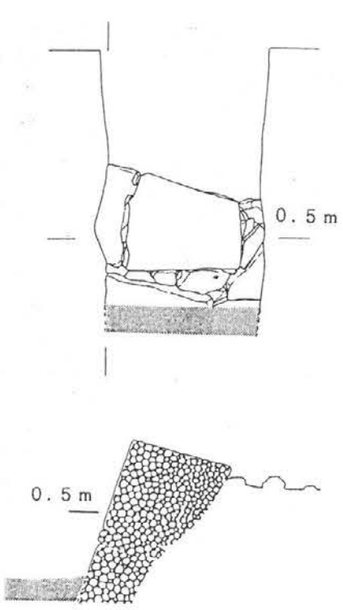
第１図　安政－慶応頃の小浜城絵図



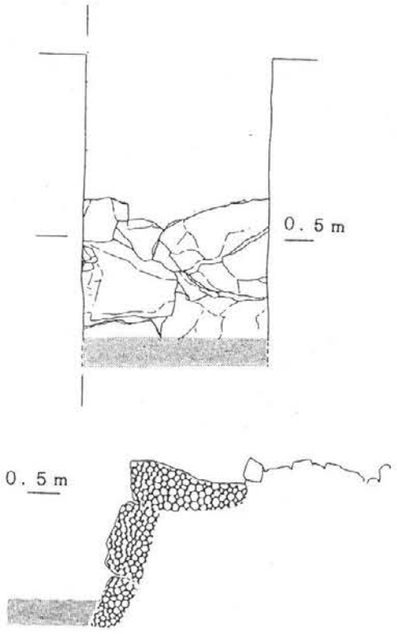
第２図　調査区配置図



第３図　二の丸～三の丸南輪石垣実測図



第４図　船見櫓石垣実測図



第５図　西の丸内堀石垣実測図

0　2m

山田中世墓群の概要

遺跡名	山田中世墓群
所在地	福井県大飯郡大飯町山田
調査原因	近畿自動車道敦賀線建設事業
調査期間	平成11年4月8日～平成11年11月30日
調査主体	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査担当	赤澤徳明・御嶽貞義・鯵本眞友美・市原久資・佐治栄次・川島清人
調査面積	約3,500㎡
時代	古墳時代後期（6世紀前半～7世紀前半）・中世後期（14世紀後半～16世紀後半）

【調査の概要】

大飯町の中心部には山脈と山脈とに挟まれた細長い渓谷があります。この中央を佐分利川が縦走して、その両岸に平野が展開しています。佐分利川を遡り本郷地区を越えたところに西に向かって開く谷に山田集落がありますが、山田中世墓群はその背後にあります。今回、発掘調査を行ったのは谷の中ほどと出口付近にあたります。調査面積は約3,500㎡で遺跡のほぼ全域と考えています。

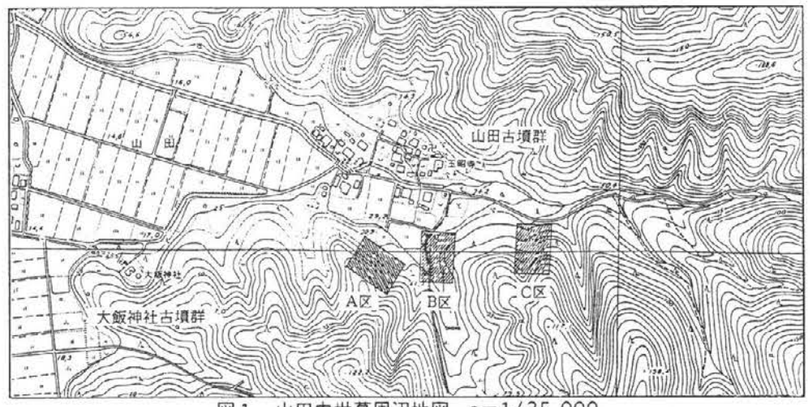


図１　山田中世墓周辺地図　s＝1/25,000

山田中世墓群は1998年（平成10年）に行った試掘調査により、今から約1,400年前の古墳時代後期の古墳と約500年前の中世後期の墓地（A・B・Cの3地区に墓群の存在がみられた）があることがわかりました。

［中世墓群］

発掘調査は1999年（平成11年）4月から行いました。調査はA地区から、B、C地区と順次行いました。

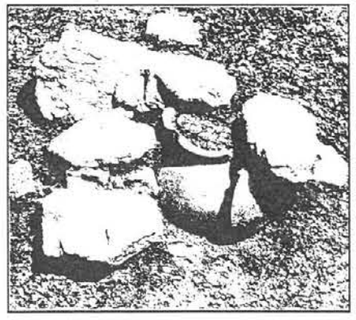


図２　A区蔵骨器出土状態

特にB地区では約2m×2mの方形区画墓を中心として、墓地が形成された様子がみられ当時の墓地造営が、計画的に行われていたことが分かりました。墓の規模（数）は予想していたよりも多くみつかり、なかでも墓の下から壷・甕（蔵骨器）や焼骨等が出土したものがありました（山田中世墓では土葬の跡を明確に残すものはなく、ほとんどが火葬墓でした）。こうした蔵骨器と考えられる壷や甕は、越前焼などの陶器製のものは当時においても高価で、この墓地の被葬者・年代を知るうえでとても貴重な手がかりを与

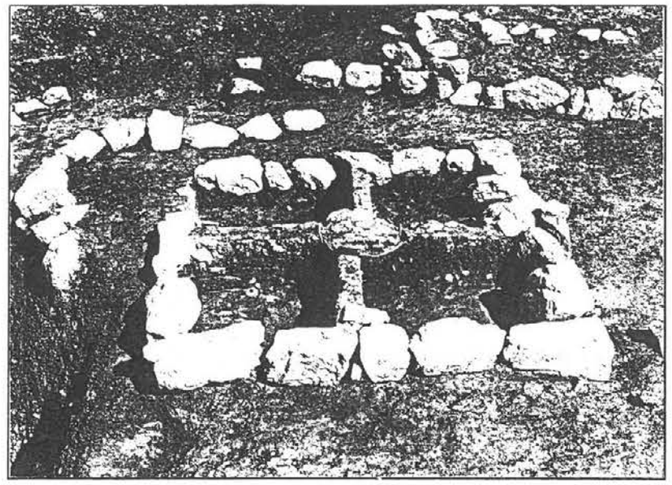


図３　Ｂ区方形区画墓

えてくれます。

また、墓標と思われる石造物（宝篋印塔・五輪塔・板碑等）が大量に出土し、当時の様子を彷彿とさせます。なおこれらの石造物のほとんどは、高浜町の日引で採れる石（通称：日引石）を使用していました。主な出土遺物は、土師皿、陶器破片、石造物、古銭などでした。いずれも時代性を反映するもので、今後整理作業が進んでいけばさらに詳しいことが分かってきます。

［古墳群］

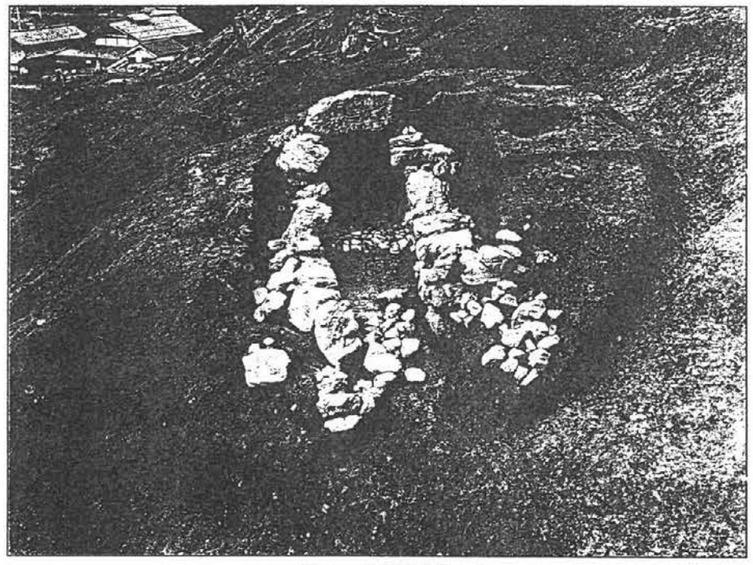


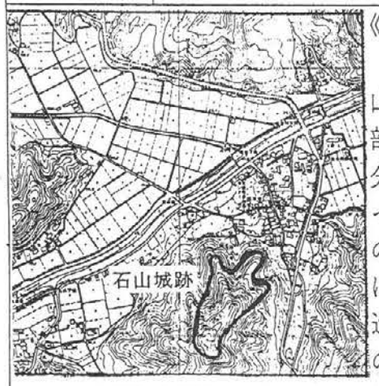
図４　２号墳全景

古墳は全部で4基調査しました。4基の内3基は横穴式石室を埋葬施設とする円墳でした。残りの1基は埋葬施設に当たる部分が削平を受けていたため、確認できませんでした。このタイプの古墳は1998年に大飯神社古墳群で調査したものと同様のもので、古墳時代後期の群集墳では一般的にみられるものです。残念なことに山田ではそのほとんどが破壊された状態で、副葬品の出土も少なかったため全容を窺い知ることはできません。

ちなみに副葬品は、須恵器の坏・有蓋高坏・平瓶・壷・長頸壷、土師器の壷、鉄器は刀、装身具は耳環、玉類では勾玉等が出土しています。

石室は中世墓を造る時に石材を使用している可能性も考えられ、その当時に壊されたものかも知れません。このことに関連するかどうかは分かりませんが、中世墓から須恵器の壷が出土している例もみられました。

遺　跡　名	石山城跡
所　在　地	大飯郡大飯町石山
調査原因	近畿自動車道敦賀線建設事業
調査期間	平成１１年１０月５日～現在
調査主体	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査担当	鯵本眞由美・市原久資・川嶋清人
調査面積	約８０００㎡（うち今年度　工事用道路部分３１５０㎡）
時　　代	室町時代（１６世紀）



縮尺S＝1：50．000

《概要》

石山城跡は、大飯町佐分利地区、石山集落の裏山にある戦国期の山城です。城下には、高浜町薗部から名田庄村坂本に達する幹道が通り、また佐分利川を望める立地から石山が交通の要所であったと考えられます。城としては、海抜 190.5m の山頂部に主郭を配し、この幹道を見通せるように城の施設が尾根上に展開しています。石山城の造られた年代は明らかでありませんが、文献などの武藤氏の若狭での初現から享禄年中（1528～1532）であるとも考えられています。

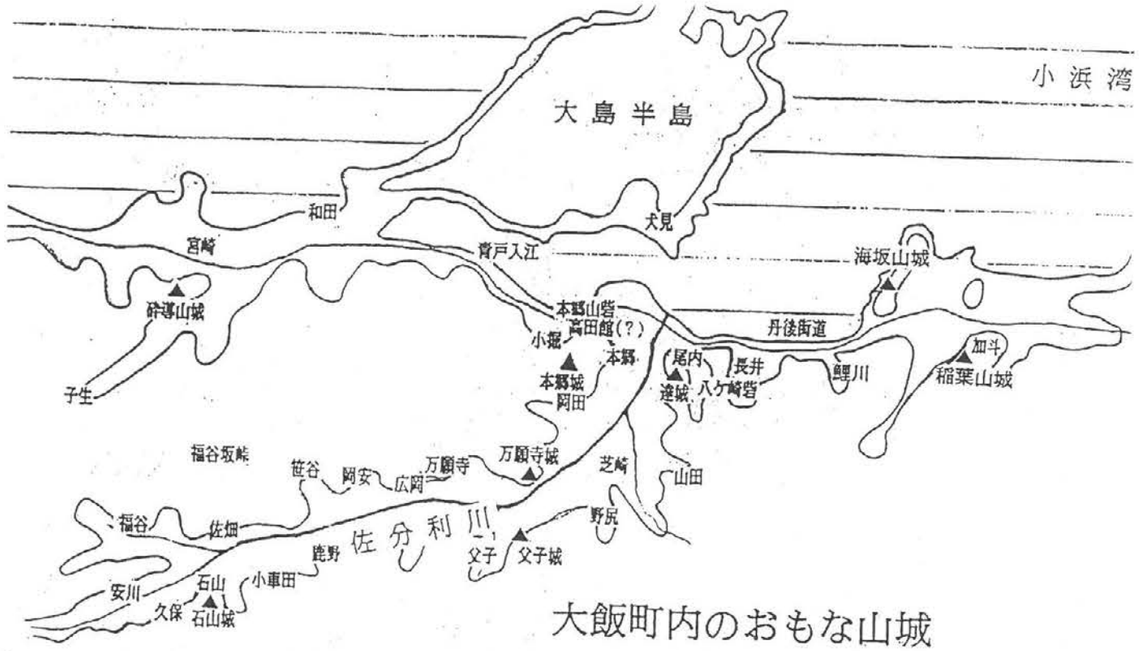
≪調査内容≫

石山城跡は、山全体を城として機能させていた為、広大な面積を測ります。その中で調査区を４区に分割して、今年度は工事用道路部分の調査を行っています。現在の時点でＡ区の尾根先端部とＤ区の平坦部の調査を継続中です。

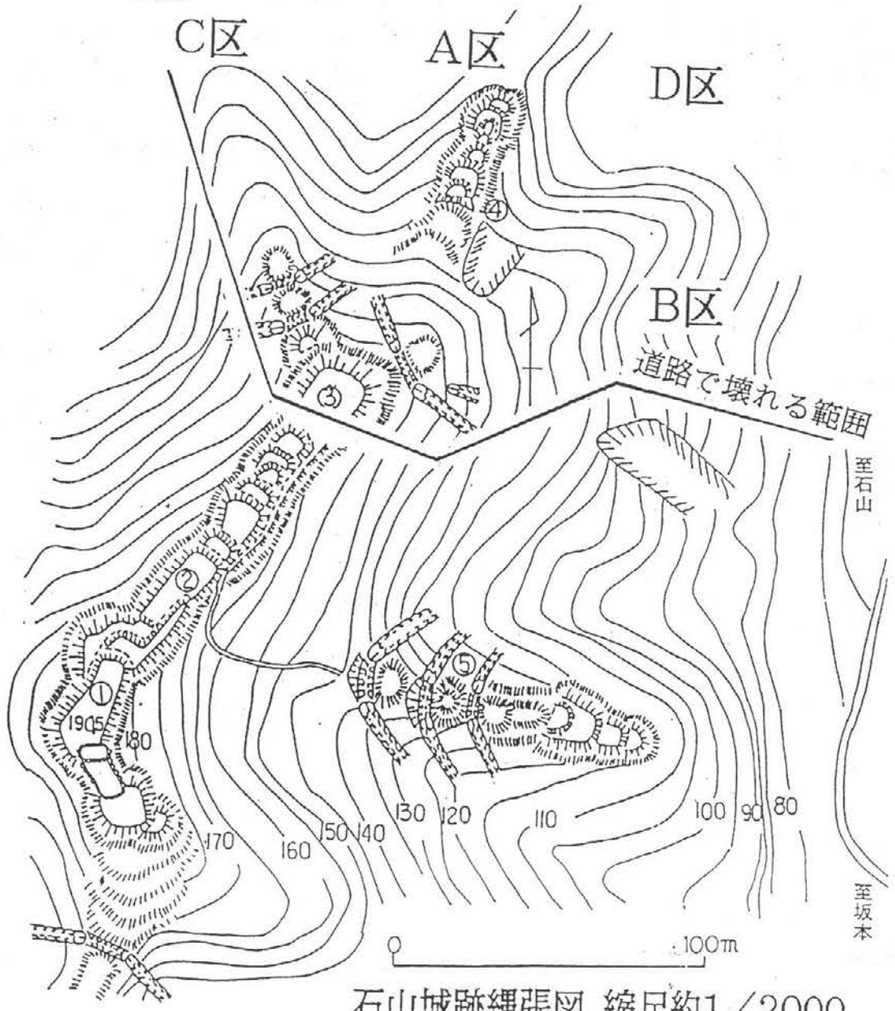
<A 区>　調査前には曲輪（平坦面）の存在を確認していましたが、表土を剥いだところ先端部のみ曲輪として機能していたことが窺えます。遺構は、柵列や建物の痕跡はありませんが、佐分利地区を全体的に見渡せることから見張り場として使用していたのかも知れません。また、同じ平坦部から集石遺構を確認しています。礫を除去したところ、中央から鉢を１点検出しました。この鉢は底部を上に向けた状態だったため、蓋としての利用が考えられます。現在調査を継続しており、今後この遺構の性格が判明するでしょう。

<D 区>　Ｄ区は、真中の尾根と東側の尾根の間に位置しており、３段の平坦面を形成しています。遺構は最下段の平坦面から建物（約２棟分）の礎石を検出しています。

調査区外（集落方向）に向かっても何段もの平坦面を形成していくことから、この部分が城と館（居館）を繋ぐ通路的役割を果たし、城の虎口（入口）部分に相当することも考えられます。　（市原　久資）



大飯町内のおもな山城



石山城跡縄張図 縮尺約1／2000

戦国の若狭－人と城－ 大森 宏著から 抜粋

脇坂城跡

所在地	福井県大飯郡高浜町西三松脇坂地係
調査原因	福井県による公園造成事業
調査期間	平成11年6月21日～平成11年8月20日
調査主体	高浜町教育委員会
調査担当	高浜町郷土資料館　技師　安倍義治
時　代	中世

周囲の環境

国道27号線、高浜町日置より主要地方道舞鶴・野原港・高浜線を内浦半島へ向けて走り、西三松集落を過ぎた地点の山上標高約70㍍の地点に所在する。青葉山より東に延びる山麓の先端に位置し突端は高浜湾に突き当たる。正面に永禄8(1565)年に築城されたと伝えられる「高浜城」を望み、また、東三松地区の山裾に点在する城郭と内浦方面の城郭とを繋ぐ絶好の位置にある。海岸沿いに走る旧街道が一望出来ることも忘れてはならない要素と思われる。

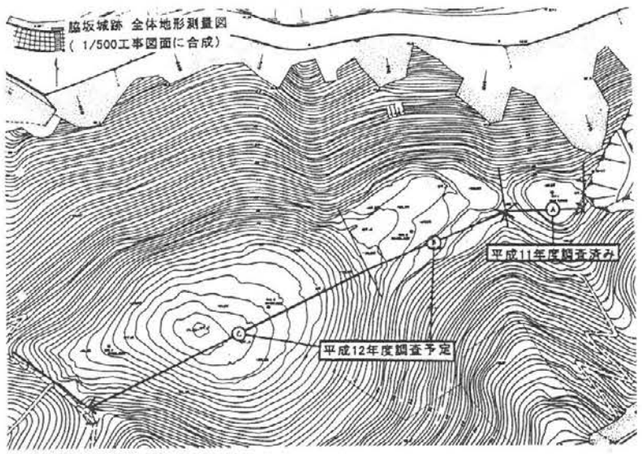
本城より北に位置する小黒飯集落の南方には「難波江城」が所在する。難波江城は「若狭郡県志」には『大草兵庫城址』と記されている。大草氏は三河国額田郡大草邑より起こったとされ、南北朝期に足利尊氏方として活躍した一族である。本城とは目と鼻の先にあることから両城跡の関係が注目される。

当該地は、本来先端部がもう150㍍ほど前方に延びていたのであるが、平成7年に崖崩れを起こして消滅している。このあたりは崩れやすい岩石で造られた古い地層で構成されている。前述の自然崩壊時の平板測量図ではダラダラと下りながらも幾つかの郭が存在したことが記録されている。

脇坂城跡位置図

S=1/10000

調査概要



遺構全体図　　S=1/2000

主要地方道の「三松第2トンネル」の真上あたり、旧道で尾根が分断された部分が遺構の最西端にあたると思われる。現存する脇坂城跡全体をA・B・Cの3地区に分け、本年度は工事側の都合により先端部分のA地区のみ調査を実施した。

発掘区域は最大長約20㍍の隅丸三角形の最上郭と、1.4㍍ほど下で北側を除いて取り巻く幅1㍍強の細長い郭、更に同程度下って同様の郭を持つ遺構である。北側はかなり峻険な斜面を形成しているため、郭や防護手段となる遺構は認められない。南側に関しては、調査中の遺構より下に多数の半月状の連郭が確認されたが、調査期間の都合上、発掘調査区域からは割愛した。なお、A地区と西側のB地区の間は堀切により分断されており、地形状の理由により自然堆積は殆ど無いものと思われた。

調査前の聞き取り段階で、戦後この尾根上で西三松集落の方がサツマイモ畑を耕作され

A地区全景（西方より）

ていたことがわかっていたので、現地表面は既に当時の遺構面を削平している可能性もあると考えられた。上面の腐食土と耕作土を剥がすと20cmほど下にほぼ平面的な岩盤を検出した。岩盤は風化の進んだ特有の岩石で、上からの耕作によりかなり損壊しており、柵列等の痕跡を検出する事は出来なかった。ただ、最上郭の北側1㍍程は平地を広げるため中央部の土を持ってきて造成しているようであった。

郭を取り巻く斜面とそれに続く郭は、同様に腐食を剥いで調査を進めていった。取り巻きの郭は岩盤ではなく、斜面の土を削り出し平らに造成していたが、やはり柵列は確認できなかった。

背後の堀切には縦断する東西方向にトレンチを入れてみた。地山の岩盤の上に明らかに造成土が約80cmのっており、腐植土層もその造成土の上面でしか検出されなかった。以上の事実により、堀のラインは2段目の郭から続く現状ラインと一致すると考えて良いと思われる。幅は約5㍍、深さはA地区側・B地区側ともに約1.4㍍を計測した。底はV字形を成さず、掘りあげた後殆ど手を加えていないように思える。A地区終了後、B地区の東側を一部分腐食を剥がし調査を終了した。

出土遺物

出土量は全体で約300点の出土を見たが、殆ど近世の陶器片で占められた。出土地点は90%が最上郭からの出土であり、堀切からの出土は無かった。腐食直下の耕作土からは聞き取り調査で判明した「戦後の耕作」を裏付ける乾燥した芋（五穀）とナタややすりなどの金属器も出土した。陶器の殆どが細片であり、腐植土及び直下の耕作土から出土しており、染付の茶碗類が多く見られた。なお、最上郭の区画では瓦片が多く出土したが、いずれも近世の平瓦であった。建築物があったような形跡が無いので、おそらく畑の土止めに二次利用されたものではないかと考えられる。

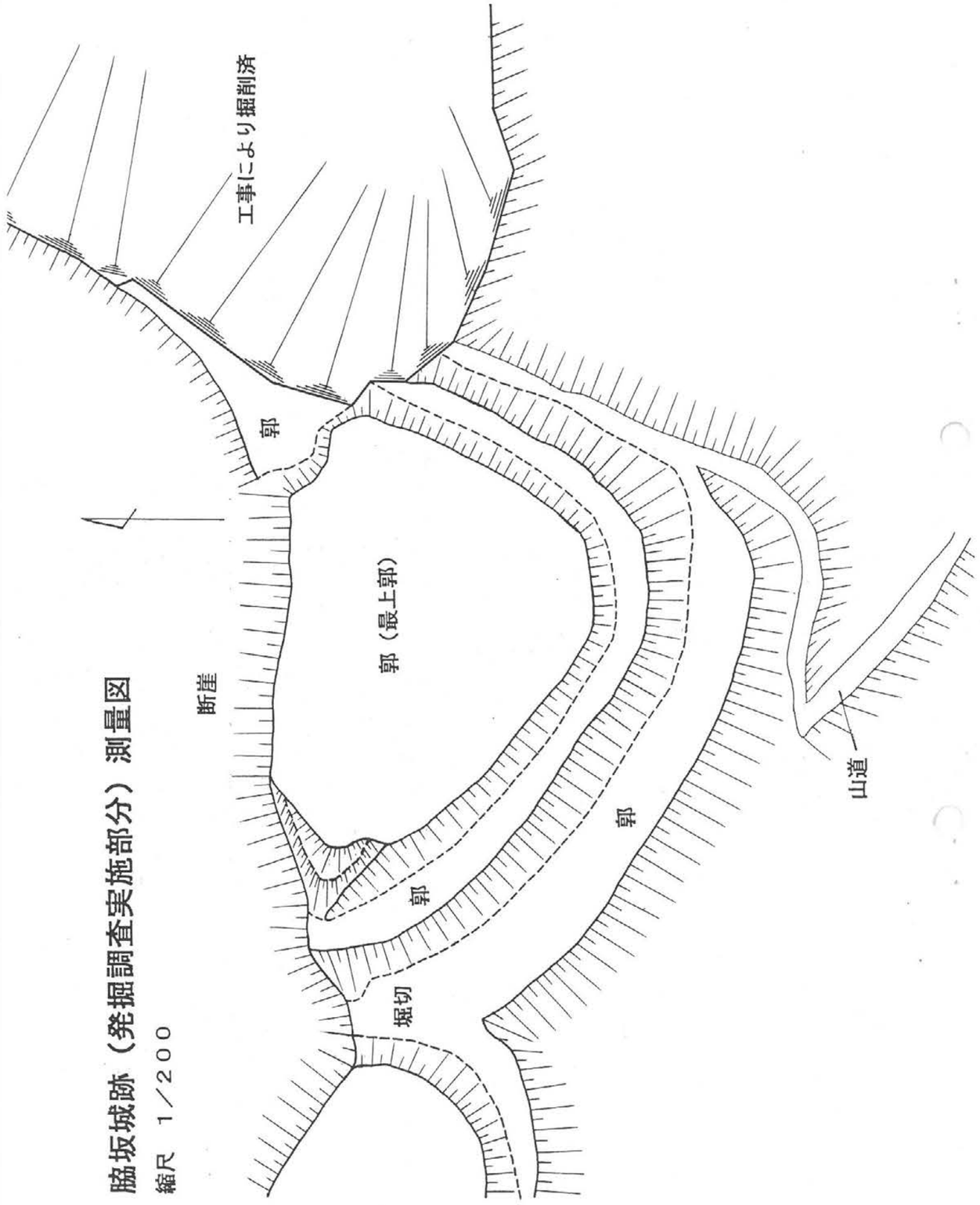
いずれにしろ明確なのは、築城当時まで遡れる資料は無いということである。

まとめ

本城は地元に伝説無く、文献にも表れないこと、当時の遺物が全く出土しないことから、戦闘時に急いで築城されたが実際は使用されなかったか、単なる見張り台的なものであった可能性が高いと思われる。現時点ではA地区のみ調査が終わった段階であり、背後のB・C地区についての調査終了を待たないとA地区自体の性格も決定できないと考えている。

調査区域の周囲の地形を見ると、北と東は海に面し自然の要害を形成している。南については比較的なだらかで、各所に小郭を連ねて防御に務めている。西の守りは堀切である。また、最上郭は周囲を取り巻く郭と人の背丈ほどの段差で隔てられている。A地区ではこのように配慮を感じる設計者の意図が伝わってくる。西は堀切を経てB地区に続く。B地区とC地区の間には掘切、或いは土塁のような防御施設は確認できなかったが、B地区に明確な平地が複数存在していることも事実である。更にC地区の最西端には中規模の堀切が視認されていた。しかし、この堀切は自然地形である疑いも捨てきれない。ただ、中世山城の本質は、元々の自然地形を生かし最小限の土木工事で城として機能させることにある。それは平地に城を築く後世の城と違い、武威を示すためのものではなく、真に実戦のための城であることを示している。つまり堀切のあるなしは城の遺構であるか、ないかの判断根拠にはならないと思われる。普通、山城は山頂に本丸（主郭）を築き、尾根沿いに下って二の丸（二郭）、三の丸（三郭）と築いてゆくものであるが、本城が見張り台的な遺構だとすれば、それもあてはまらないと思われる。

以上のような理由で、現時点では本城が陣としての城であるのか、単なる見張り所なのか。どこまでが遺構範囲なのか等の結論が出せない状況である。



脇坂城跡（発掘調査実施部分）測量図

縮尺 1／200